https://rodosoken.com/

江口英一先生のご逝去を悼む

大須　眞治

2008年11月22日午前４時、中央大学名誉教授で社会政策学会名誉会員の江口英一先生が肺炎のため亡くなられました。享年90歳でした。

先生は1981年に『現代の「低所得層」』で野呂栄太郎賞を受賞、翌年同じ『現代の「低所得層」』で日本学士院賞を受賞されました。先生が戦後日本の貧困研究の第１人者であることには誰も異論のないところでしょう。貧困研究にあたって、先生は事実から出発する研究を貫かれました。また、ただ単に貧困を静止的に捉えるのではなく、そこから抜け出そうとする人々の運動にも大きな関心を払ってこられました。

先生が労働総研にもっとも近い関係で仕事されたのが『現代の労働者階級』（新日本出版社、1993年）です。この本はもともと1990年に発足して間もない全労連が「人間らしく生き、働く」という運動方針を具体化するために労働総研に委嘱した調査研究を基礎につくられたものでした。この調査研究は一つの視点で貫かれて実施され、組合の聞き取り調査、個人アンケート調査、個人聞き取り調査など三次にわたる調査を実施しました。アンケート調査は4,153人の有効回答を得ました。調査で貫かれた視点とは労働者を、仕事と（家庭）生活の二つの視点からトータルに捉えることでした。江口先生はこの視点を何度もくりかえして強調され、調査をすすめました。調査分析では、労働者像を26の類型に分け、それぞれの類型を解明することにより労働者の全体像を解明する試みをしました。その結果、問題の現れ方は多様であること、多様ではあるが共通する矛盾をもっていることを明らかにすることができました。

調査分析をすすめる過程では何度も議論を繰り返し、納得するまで議論しました。アンケート調査の集計と並んで、労働者個人の聞き取り調査も行いました。聞き取り調査には先生が先頭に立ち、一人ひとりの家や職場を訪ね、仕事のこと家庭生活のことなど詳しく聞き取りしました。調査結果をまとめる時にはいつも聞き取った人の姿を頭に浮かべて行うようにしました。その結果、調査結果は膨大なものになっていきました。

しかし、調査結果は全労連の第７回大会までにまとめて、報告しなければなりませんでした。そのため、報告書を印刷する最終段階では、全員が印刷会社に泊まり込んで校正するような状態になりました。労働運動誌の編集部や全労連からも何人かが応援にきてくれました。その時、先生はすでにかなりのご高齢になっておりましたが、深夜まで作業されておられました。調査研究への先生の執念を実感させられた場面でした。

こうして報告書「人間らしい労働と生活の実現をめざして―『過重労働』下の労働と生活に関する調査報告―」が1992年７月にでき、これを基に約１年かけて『現代の労働者階級』をつくりました。本では報告書の内容にさらに個別調査のケースを加え充実させるなどしました。そのため、本はA4判で450頁、12,000円のものになってしまいました。厚い、重い、高いがこの本の前評判でしたがこの本によって全労連と労働総研は野呂栄太郎賞を受賞することになりました。

江口先生が亡くなられて、印刷所で一緒に作業したことなどが今更懐かしく思われます。江口先生安らかにお眠り下さい。

（おおす　しんじ・事務局長・中央大学教授）